

東京六大学野球リーグ戦における自身と他投手の配球の比較  
Comparison of sequence of pitches between oneself and other pitchers  
in the Tokyo Big Six Baseball League

1K07A035-0

大石達也

指導教員 主査 葛西順一先生

副査 彼末一之先生

【目的】

野球における投手というポジションには、速球派投手、技巧派投手、など様々なタイプの投手がおり、それぞれの投手が良さを最大限に活かすことのできる配球を組み立て投球している。

本研究では自身の試合における配球と他投手の配球を比較し、自身の投手としての特徴を明らかにすることを目的とする。また、本研究で得られた結果をもとに、今後どのような投手になっていくべきかについて考察する。

【方法】

自身が東京六大学野球リーグに所属し試合出場した、2007年春季リーグ戦から2010年秋季リーグ戦における配球のデータと他投手の試合における配球のデータを入力した。入力したデータからカウント別および球種別の投球に対する打撃成績として、打率(安打数/打席数)、三振率(三振数/打席数)を算出した。

さらに自身の4年間の投手成績と他投手(過去の投手の成績については六大学野球HPに掲載されているデータ)の投手成績もデータ入力した。入力したデータから各シーズンの試合、完投、無点勝利、無四球勝利、敗北、引分、打者、投球回、安打、本塁打、四死球、三振、失点、自責点の数であった。それらのデータから被安打/試合(試合=9回)、被本塁打/試合、四死球/試合、奪三振/試合、自責点/試合を算出した。

【結果】

・ 六大学野球における4年間の投球成績

著者(投手O)は完投がなく、完了しかなかく勝敗もあまりついていないことから主にリリーフとして試合に投板した。投手Sは完投もしており勝敗もついていることから、先発として試合に登板した。

・ 試合における配球および打撃成績の比較

六大学野球の右投手、投手Oともに左右打者に関係なく外角を中心とした配球になっていることが明らかとなった。また、内角の球を安打される割合は少なかった。投手Sは左右打者に関係なく内角、外角を上手く使っていた。

・ カウント別の配球および打撃成績

六大学野球の右投手、投手O、投手Sともに、打者有利といわれるカウントや、平行カウントから安打されることが多く、投手有利なカウントにおいては、あまり安打されないことがわかった。一方、投手Sは左打者においては2-0、2-1、2-2といったカウントから三振を奪う割合も高いが、安打される割合も高くなっているが、右打者においては大きな差は見られなかった。

奪三振に関しては、六大学野球の右投手、投手O、投手Sともに2-0、2-1といった投手有利なカウントにおいて三振を多く奪っていた。

【考察】

・ 過去の投手と投手Oとの比較

投手Oの4年間の投球成績は、被安打率、被本塁打率、四死球率、自責点のすべてにおいて、過去六大学投手の平均値よりも明らかに少ないことがわかった。なおかつ奪三振率は非常に高く、三振を多く奪っている投手であることがわかった。現在の自分の最大の長所といえるのはボールの速さである。ボールが速い投手は、遅い投手と比較してボールをリリースしてから打撃までの時間が短い。奪三振が多いことは自分の長所であるボールの速さが関連しているのかもしれない。

・ 投手Oと投手Sとの比較

投手Oと投手Sとのコース別の配球および打撃成績を比較すると、投手Sは投手Oに比べて右打者に対しても左打者に対しても、内角と外角を上手く使っていることがわかった。内角球を使うことのメリットは、打者が狙い球を絞りにくくなること、内角と外角では打撃ポイントが異なるので、タイミングがとりにくくなることがある。一方、デメリットとしては、投手にとってある特定のコースを狙って投げるよりも様々なコースに投げ分けるほうが難しいことや、内角に投球しようとしたボールは一步間違えると死球や長打の可能性もある。投手Sは長所のコントロールを活かし、内角球を使って打者に的を絞らせない投球をしているのかもしれない。